

中学生連載企画

私たちのふるさと松山学 No.38

勝山中学校

「ふるさと勝山めぐり」

私たちは、「総合的な学習の時間」に自分たちの住む地域に出かけ、歴史や文化について調べました。

勝山の文化

小泉八雲が世界に紹介した「十六日桜」

昔、龍穩寺にあった十六日桜は、旧暦正月十六日に花を咲かせるヤマザクラの一種で死期の近づいた山越に住む老父が「ひと目桜の花を見て死にたい」と訴えたことから、その息子が庭の桜の木に何度も何度もお願いし、最後にはそのまごころによって桜が花をつけたという伝説があります。紹介文の「夜が明けて、真白に降り積もった雪の中に見事な桜の花が咲いていた」という部分を読んで、とても幻想的に感じました。現在は龍穩寺の桜も松山大雪襲で焼けてしまい、株分け



「十六日桜」にまつわる俳句が記された石碑



ふるさと勝山めぐり

されたり、周囲の別の桜と交配されたりして、もともとの十六日桜ではなくなりました。

勝山の祭り

「鐘馗さん」の不思議な伝説

宝龜3(772)年、安養寺(現在の鐘馗寺)前の大きな屋敷にお化けが出るという噂が立ちました。それを聞きつけた修行者がその正体を見届けようと屋敷に隠れて待っていると、黒い影が壁の中に入っていくのが見えました。壁には、鐘馗大神の御真影(肖像画)が貼られていたので、その御真影を安養寺に移し、本尊としてまつることにしました。それ以降、お化けは

出なくなり、この地方に流行していた熱病も消え去ったそうです。以来、鐘馗大神は疫病除け、子どもの守護神として親しまれるようになりました。現在は7月11・12日に毎年お祭りが行われていて、当日は本堂の御真影が開帳されています。

勝山ゆかりの人

放浪の俳人・種田山頭火が住んだ二草庵

放浪の俳人・種田山頭火は「今まで日本中を歩いたが、伊予の国が一番よかったと思う。風土も美しく人情もよかった。どうせ死ぬのなら、伊予へ渡るとしようか」と友人らに相談し、「二草庵」を世話してもらったそうです。落ち着いた環境と、温かい人情、そして好きな道後温泉と酒に心をほぐされ、すばらしい句が次々とここで誕生しました。一草庵には山頭火の4つの句碑が建てられ、そのうち『鉄鉢の中へも霞』の句は、山頭火が随筆で「私は満身満心に霞を浴びたのである」と語っていることから、こ

の句が単なる風景を描いているだけではないことがわかりました。

勝山のシンボル

「松山城」の見える勝山

加藤嘉明が、関ヶ原の戦いでの戦功が認められ、今の松山城が築かれました。勝山には松の木が多く見られたこと、勝山に神社があったため、そのままでは恐れ多いということから名を松山と改めたということがあります。実際に勝山に登ってみると、「登り石垣」や「門・櫓・塀」がしっかりと城を囲んでいて、攻めと守りのことをとても考

えて作られていることを実感しました。また、天守には、

勝山の自然

「紫井戸」と「片目鮎の井戸」

修復中に見つかった江戸時代の木工さんが描いたとみられる落書きのある下見板が展示されていて、その中の侍の似顔絵から、当時の人たちのユーモアを感じる事ができました。

伊予節にうたわれている「紫井戸」はこの井戸の水質が良く、この水でしよう油を造ったので、当時のしょう油の呼び名「むらさき」から、このように呼ばれるようになったそうです。今は枯れています。岩で囲まれ、直径2.5mほどの大きな井戸が当時の面影を残しています。また、その近くにある「片目鮎の井戸」は、弘

調べてみて

勝山の先人には偉大なことを成し遂げた人が多くいて、これからもそれを伝えていくことが大切だと思いました。

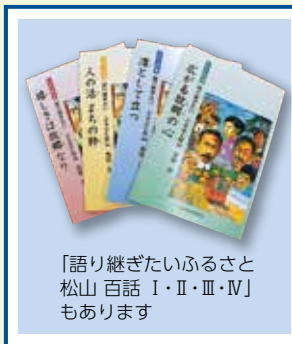


(前列左から) 小島 彩聖さん、渡部 友緒子さん、福本 大翔さん、橋本 莉一さん
(後列左から) 西島 みかさん、内藤 颯真さん、太場 信之介さん(いずれも2年生)

法大師が片方焼かれたフナを生き返らせたという伝説が残っています。調べていくと、この辺りは昔から水の豊富なところで、大正末期ごろまでは地下水があちこちで自噴していたそうです。井戸は枯れてしまったけれど、「清水」「味酒」ということばが、町名や学校名などとなって今も地域に生き続けています。



文化祭で紹介した「ふるさと勝山めぐり」新聞(松山城の紹介)



「語り継ぎたいふるさと松山百話 I・II・III・IV」もあります

先人と文化の読み物教材
広がれ!
ふるさと松山の心
松山ゆかりの先人78人と伝統文化や歴史のお話17話を掲載しています。購入方法など詳細は市教育研修センター事務所 ☎989-5144 へお問い合わせください。